

「救急疾患の輸液療法」

Fluid-Electrolyte Therapy in Acute Illness

by W. C. Shoemaker, W. F. Walker.

〔訳〕 小林 昭夫 国立小児科病院・内科
藪 田 敬次郎 東京女子医科大学・小児科

神戸大学教授・麻酔学
岩 井 誠 三

生体諸機能を円滑に維持していくために体液が極めて重要な役割を演じていることは周知のことであり、内科系・外科系をとわず治療上、輸液療法の占める位置はきわめて大きい。このように重要な意義を有する輸液療法ではあるが、日常取扱う症例の大部分が水分、電解質調節機能に著しい異常を有していないため、輸液の量および質に多少の不合理的であっても患者の有する調節機構に助けられて著しい障害をきたさないことが多く、以前はあまり注意がはられなかった。

しかしここ十数年の間に水分・電解質代謝に関する研究が著しく進歩し、腎・内分泌機能との関係、それぞれのイオンの有する生理学的意義、加齢変化などがしだいに解明され、一方では遭遇する疾患に重度外傷、ショック、内分泌異常等がしだいに増加し、これらの病態生理が解明されるにつれて、輸液療法の量と質の問題が治療効果に重大な意義を有することが理解されるようになり、数多くの専門的な書籍が市販されてこの方面の啓蒙の役目を果たしてきている。しかし、これらの大部分は理論的な解説が主であり、書物の記載

を十分に理解することができても目の前の患者にその知識を直ちに応用していくためには、かなりの臨床経験が必要であり、実際に臨床にたずさわる者の日々の手引きとしては難解なものも少なくない。この問題を解消して実地医家にとってただちに役に立つことを目的として出版されたのが原著の大きなねらいである。

このたび、その完訳が出版されたことは適当なこの種の手引き書がみられなかったわが国の現状ではきわめて有意義なことである。この種の完訳にあたって訳者自身が述べているように原著者のニュアンスを日本語のうえからいかに忠実に表現するか、のむつかしさがある。このためには訳者がその方面において十分な知識と経験をもっていることが必要である。今回は訳者として輸液療法に関して長い研究歴と豊富な臨床経験をもっておられる小林・藪田両博士があたられ、この問題はみごとに解消されている。さらに固くない平易な文章にされていることも取り組みやすさを与えてくれる大きな利点となり、また英語がそのまま日本語の慣用語として使用されているものについての表現方法にも細かい配慮

がなされ、新しくこの方面に興味を抱く学生諸君らが言葉の意味を理解するのに大いに役立つと思われ、訳者の努力に敬意を表する。

原書の内容は臨床上、体液電解質異常を理解していくために必要なごく基礎的な知識の解説、体液の量、質の異常と病態、老人、小児の特殊性、各イオンの調節と病態などについてきわめてわかりやすく説明されており、ごく特殊な場合を除いて、われわれが日常遭遇しうる症例の大部分が含まれており、それぞれの症例において実際に輸液療法を開始するにあたってのきわめて実地的な手引き書としての利用価値が大きく、学生・研修医のみならず、日頃、水分・電解質代謝に特別の関心をもっていない実地医家にとっても一読をすすめたい良書であり、さらに病室、手術室、ICUなどのごとく日々の輸液療法を検討し、その適正な量と量をきめていかねばならない場所には考え方の手引きとして備えておきたい本だと考えて推せんする。

B5・頁240・図61・写真6
¥7,000 ㊦ 200
医学書院刊